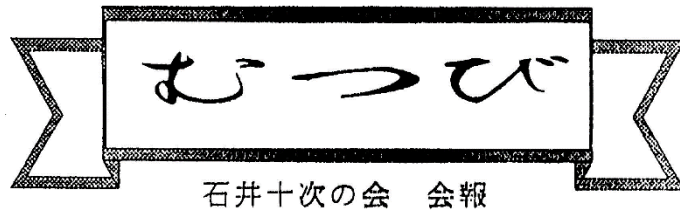


2023年
(令和5年)
6月15日



309号

「友愛社で過ごした春夏秋冬は夢が叶う為の礎でした」 —後編—

溝尻 輝政

私がいた頃の友愛館では、牛2頭、豚1頭を飼っていました。冬の朝は真っ暗いうちから牛の餌の飼いや葉作りのハミキリ（餌切り）から始まり毎朝大忙しでした。牛や豚達が美味しそうに餌を食べている様子や健康状態等を見てから、急いで制服に着替え、朝食を済ませて中学校まで4 Km以上の道を天候に関係なく歩いて登校の毎日でした。途中、長い坂道があります。登校時は、みんな一緒になって元気よく下り坂を走って競争をし、下校時には空腹の中、帰宅後の作業が待っている為に小走りに坂道を登っていた事も懐かしいです。現在はこの道を利用する者もない様で林の中にあった坂道は、雑木林・竹林と化して「けもの道」状態です。近いうちに中学時代の思い出の坂道を往復してみたいと考えておりますが、身体的に実現できるかどうか・・・。

春休みになると里山の斜面に杉の苗木を植林する作業があります。ヤマンガ（山鋤）で斜面に穴をひとつひとつ掘り杉苗を入れては土を戻し踏み固める作業でした。その杉の木も30年後には三友館などの建設資材として利用された事を児嶋草次郎理事長よりお話をお伺いした時は「あの時の苦労した植林が役にたったんだ」と感無量になりました。

そんなこんなで友愛館で日々過ごして行く中で自身の体力、筋力、辛い時でも負けない精神力が自然と備わった事を自分なりに感じた事がありました。それは友愛社内のマラソン大会に参加し、上位成績を残したことです。当時は運動場も無く田んぼと畑の廻りにある道路を周回する形で走りました。それまで上位の成績など皆無に等しかったので自然と自慢顔になった事が懐かしく思えます。

それではここで、友愛社で得た労苦による忍耐、根性、精神力が私の人生にも大きな影響を与えた思い出をひとつ綴りたいと思います。

中学3年の誕生日プレゼントを頂ける時の事だったと記憶しているのですが、当時の児嶋琥一郎先生は月の誕生者にプレゼントを渡される前に一人一人と正座して対面で色々なお話をされるのが恒例のようでした。私も中学3年の誕生月に広い静養館にて先生のお話を拝聴している時「高校に行かないか」と云われ躊躇無く「中学を卒業したら就職します」と答え、卒業後、宮崎市内の小さなお菓子屋さんに丁稚奉公として住み込みで働く事になりました。住環境が良いとも言えず窓も無く3畳間に2年先輩と二人で寝食を共にし、テレビも娯楽も無く車も無かったので、唯一の日曜日は本を読むのが楽しみでした。

その読書も影響して1年目を過ぎたあたりから「人生は勉強が大事」と考えるようになりNHK学園の通信教育を受講しました。しかし、朝8時前から夜の8時過ぎまで働いていたので勉強する時間がとれず通信教育はすぐに挫折。そこで、勉強のやれる環境でなければ駄目だと思い、夜間の定時制に通うため夕方5時過ぎに終了する仕事へと転職しました。それから念願叶って同級生達よりも3年遅れの夜間高校・電気科への入学でした。

そこでは、現役で入学した方から社会人等の多種多様な職業の方達と4年間過ごしました。在学中にアマチュア無線の資格を取得することができました。それからは無線通信士への夢が膨らみ世界を航行する船舶の無線通信士に憧れ、どうにか第1級無線通信士の国家資格の免状まで取得することが出来ました。友愛社で体験した労苦による忍耐力、我慢強くなった精神力などがあったからこそ出来たものと強く思っています。しかし、時代の流れでモールス通信が主流の世界航路の船舶通信士にも、技術革新に伴う合理化が始まり募集も減多にありませんでした。生活する為に仕方なく東京に出て計測機器等の製造会社に勤めておりましたが、幸いにも運輸省（現国土交通省航空局）で無線通信士の募集があり、晴れて航空無線業務に従事する事が出来ました。資格取得とその資格を生かした分野に携わるまで年数はかかりましたが、自分なりに目標を持って国家資格を取得した事は私の大きな誇りです。日本各地にある空港の管制塔で航空管制業務に不可欠なレーダー、無線電話等の電子機器類の運用・管理等で航空機の安全運行に70歳まで寄与してまいりました。

児嶋虬一郎先生の「高校に行かないか」の一言にうなずいていたら、今まで私が歩んできた人生とは違う人生があったかも知れません。しかし私の場合は少しばかり遠回りをしましたが、夜間高校の良き友の影響もあり、自分の選んだ道を歩むことが出来て悔いは無かったと自負しております。

現在、友愛社に在園されている皆さんも色々な夢を持って生活されていると思います。5年、10年、20年先の自分を見据えて夢を追い求め、友愛社で培った粘り、精神力で自分からチャンスを作り、自分の手で、諦めずに志を掴んで欲しいと願っています。

数多くの先輩諸氏が卒園され夢を求めて努力された結果、色々な分野で夢を自分のものにしていらっしゃいます。

在園生も大きな夢を抱き自身で運命を切り拓く努力をしてください。

チャンスは待っていても訪れないと思います。友愛社で得られた経験を礎にして常日頃から勉学等に勤しみ、夢と希望を糧にして励みを持って努力すれば「夢」が叶うものと信じております。私も陰ながら元気な間は少額ではありますが奨学金等を通して皆さんの成長を少しでも応援したいと考えております。

有隣荘(大原家旧別邸)を訪ねて

有隣荘は、岡山県倉敷市の大原美術館 右前(倉敷川沿い)にあります。大原孫三郎が、病弱な妻 寿恵子を気遣い、「家族のための落ち着いた住まいを」と建設されました。1925年(大正14年)に着工し、1928年(昭和3年)に完成しました。

有隣荘は「論語」(古代中国の思想家 孔子の言葉)の「徳不孤 必 有 隣」^{とくは こならず かならず となりあり}より名付けられました。徳のある者は孤立しない、必ずよき協力者が現れるという意味です。

有隣荘の設計は、大原美術館を設計した薬師子主計^{かすえ}と、明治神宮や築地本願寺の造営で知られる伊東忠太の2人の優れた建築家によるものです。

内装デザインは3度の欧州留学で、西洋とエジプト美術品収集に尽力し、大原美術館の礎を築いた児島虎次郎(石井十次の長女の夫)が手がけました。

庭園は、平安神宮神苑や数々の名庭を作った近代日本庭園の先駆者 庭師 7代目小川治兵衛によるものです。巨石を配し、明るく心地良い広がり演出しています。

有隣荘は、中国の孔子廟を模したという独特の色合いの屋根瓦が、見る角度によって緑色に光り「緑御殿」とも呼ばれています。屋根瓦は泉州谷川の窯元に特別注文したものです。



有 隣 荘 (大原家旧別邸)

有隣荘には1階に洋間続きのガラス張りの小部屋があり、温室として使われました。また、洋間には御影石の暖炉が設置されました。埋め込まれた石のプレートは、児島虎次郎がエジプトで収集した品と言われています。

有隣荘は、和洋中の文化を取り入れた、大変優美な建築物として高く評価されています。有隣荘は、のちに建設された大原美術館本館5棟分もの費用がかかりましたが、孫三郎夫妻が実際に住居として利用したのは、わずか半年ほどでした。(妻 寿恵子が1930年に他界。)

有隣荘は、1935年(昭和10年)に大原美術館所有となり、それ以降は迎賓館としての役割を担い、1947年(昭和22年)昭和天皇が2泊されたことをはじめ、多くの貴賓客をお迎えしてきました。

一般には長らく非公開でしたが、1997年(平成9年)より、年2回の特別公開を兼ねて展覧会を開催しています。(2020年春～2022年春の特別展示は、新型コロナウイルス感染症の為、展示は中止。)

私は、2022年(令和4年)秋の有隣荘特別公開「マティスー光と色と」を鑑賞することができました。フランスの色彩の画家 アンリ・マティス展を、美術館会場ではなく、有隣荘の中で展示するとどうなるのか楽しみにして、初めて内部を拝見させていただきました。

有隣荘の明るく華やかな洋間、心静かに楽しめる1階の和室、そして眺望の美しい2階の和室の中での「光と色と」の展示は、本当に素晴らしいものでした。忘れられない思い出です。

参考資料 「有隣荘」(大原美術館) 「児島虎次郎 もうひとつの眼」(高梁市成羽美術館編)

編集委員 徳地 順子

～過去を満足と幸福の目をもって
振り返ることが出来るように～

私は月に一度編集委員として会議出席の為、友愛社を訪れる。友愛社の敷地に入ると直ぐ、大きな銀杏の木二本が目に入る。私が一番好きな木だ。春は美しい緑色の葉をつけ、秋には紅葉し、地面に黄金色の絨毯を敷き詰める。この木の傍らに「松本圭一 銀杏」と記された石碑が建っている。

松本圭一・1886年（明治19年）静岡県に生まれる。仙台の第二高等学校（現在の東北大学）入学後キリスト教の洗礼を受ける。ボランティアで訪れた東北育児院で石井十次に出会い衝撃と感動を覚える。石井十次永眠後、大原孫三郎の依頼を受けて、茶臼原農場学校初代校長となる。茶臼原6年目、東京帝国大学の恩師の推薦により、第3回国際労働会議に労働者代表として出席。この時の松本氏の発言が「非国民・国賊」と呼ばれることとなり、ブラジルへの出国を余儀なくされる。



松本圭一 銀杏

松本氏は、茶臼原を去る時自宅前に植えた小さな銀杏の木に「これは永久に残して下さい」と書いていた。その木は記念館と呼ばれた建物の前に植え替えられ、現在の立派な大木に成長している。銀杏の木は二本あるが、一本は松本氏、もう一本は、結婚もブラジル移住も両親に猛反対されながらも、夫に寄り添い遂げた妻ますの姿に思える。

ブラジル出国後は、エメボイ実習場として、青年技術者・農業従事者育成に尽くした。時代の波に翻弄され、苦勞しながらも生涯ブラジルで農業研究・養鶏普及を行い、1976年90歳で永眠。

松本氏が農業実習場長だった頃、いつも生徒に言っていた言葉「過去を満足と幸福の目をもって振り返ることが出来るように」彼自身が過去に味わったすべての運命に捧げる言葉である。

参考 「凜として」飯塚恭子著

編集委員 松下 さおり

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】尾崎浩一朗 （有）大坪建設工業 竹之下ユカリ 日高陽一 【西都市】緑ヶ丘造園【東京都】横尾桂一

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】山崎正彦 黒岩高広 山崎美智枝 原野茂盛 辰元圭子 越山理枝 景山武純 荒武真奈美 齊藤武志 今門幸藏 松尾フジ子 日野りつ 村田順子 【延岡市】松田良子 【日南市】佐藤彦空 【都城市】天水浩毅 松浦敬子 【西都市】田中尚子 榊立生園 【えびの市】松永康二 【高原町】西村四男 西村さと子 【綾町】黒木国昭 【高鍋町】富田美智子 池田サワ子 【木城町】河野愛 【栃木県】杉尾和子 【東京都】毛利尚武 毛利洋江 山岡雪子 坂田眞樹 坂田由美 上村直子 児玉公人 児玉千恵美 横尾桂一 【神奈川県】浦初恵 【滋賀県】奥村須磨子 【京都府】沖原美樹 【大阪府】永岡正己 【福岡県】貝島由香 山崎数彦 【大分県】植木洋子

*ここまでの掲載者は編集等の都合により5月25日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●巻頭原稿は、今月も溝尻輝政様からいただきました。まさに過去を満足と幸福の目をもって振り返って書かれた内容に、感動しました。ありがとうございました。

編集委員 松下 さおり